

1 2 1. 私は公正と義とを行ないました。

私をしいたげる者どもに私をゆだねないでください。

1 2 2. あなたのしもべの幸いの保証人となってください。

高ぶる者どもが私をしいたげないようにしてください。

1 2 3. 私の目は、あなたの救いと、あなたの義のことばとを慕って絶え入るばかりです。

1 2 4. あなたの恵みによってあなたのしもべをあしらってください。

私にあなたのおきてを教えてください。

1 2 5. 私はあなたのしもべです。

私に悟りを授けてください。

そうすれば私は、あなたのさとしを知るでしょう。

1 2 6. 今こそ主が事をなさる時です。

彼らはあなたのおしえを破りました。

1 2 7. それゆえ、私は、金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します。

1 2 8. それゆえ私は、すべてのことについて、あなたの戒めを正しいとします。

私は偽りの道をことごとく憎みます。

説教

詩篇 119 篇は、8 節ずつからなる 22 の段落に分けられます。各段落は「アレフ א」 「ベット ב」 (英語で言う と A,B) という具合に、ヘブル語アルファベットの各文字が八つずつ、見事に冒頭に並んで、各段落を「アレフ 詩篇」 「ベット詩篇」と呼びます。

全篇 176 節からなる詩篇で、最も壮大な長編ですが、主題は極めて明確で、中心テーマは神のことばです。神のことばが私たちの人生にいかにか決定的かが歌われます。それで各節の文には、「みおしえ」「さとし」「戒め」「おきて」「仰せ」「さばき」「ことば」「道」という言葉が、入れ替わり立ち替わりほぼ必ず使われて、私たちの人生に神のことばがどんなに大切かが強調されます。

121-128 節は「ו (アイン) 詩篇」と呼ばれ、各節の頭はすべてヘブル語文字の「ו (O のこと)」で始まります。

「私は公正と義とを行ないました。私をしいたげる者どもに私をゆだねないでください。」

(121) 「公正 צדק」は、通常「さばき」と訳される法律用語で、「法律、裁判、判決とその執行」を意味します。「しいたげる者」とは、「暴力で不当に圧迫・強要する者（勢力）、押し流す力」を意味します。126 節には「彼らはあなたの教えを破りました」とあるので、神のことばに逆らう何らかの敵対勢力があり、それが詩人を脅迫し、圧迫し、虐げます。それで、詩人は彼らに「ゆだねないでください」と神に祈ります。「ゆだねる」という言葉は「置く、置き去りにする」の意味で、国家のような巨大な勢力なのか、それとも単に悪の集団が神に逆らっているのかわかりませんが、いずれにせよ、詩人は、自分が神に敵対する悪い勢力に取り囲まれていて、その中に一人置き去りにしないでくださいと祈っているのです。会社や学校や家族の中で、自分一人がキリスト者ということもあるでしょうし、あるいは日本のような国では、キリスト者はほんの僅かということもあるでしょう。それでは、目を転じて世界を見渡せばどうかと言えば、これまた神の正義を行う者は乏しく、神に忠実に従う者はごく僅かというのが、いつの時代にも真実です。

そうした状況の中で、詩人は「公正と義」を行います。神に敵対する勢力に取り囲まれながらも、彼らの悪に押し流されることなく、神のみこころである律法に踏みとどまりました。それで、神の敵の「しいたげ」から救い出すよう祈るのです。

続く 122 節でも、神に逆らう「高ぶる者どもが私をしいたげないようにしてください」と、詩人は重ねて祈ります。そして、極めて不安定で危険な状況にある詩人の「幸いの保証人」になってくれるよう祈るのです。「あなたのしもべの幸いの保証人になってください。」「幸い (トブ)」は「良さ、すばらしさ」の意味で、最高に理想的な良い境遇のことです。「保証人となる」という言葉は「債権者となる、安全を保障する」の意味です。詩人は、自分の人生が最高にすばらしく良くなるよう、神が債権者となり、「保証人」になってくださいと祈るのです。

つまり、四方八方悪に取り囲まれた状況にあって、自分の力ではその巨大な流れに抗うことは無理なので、神が自分の債権者となり、安全を保障する「保証人」となるよう祈り求めるのです。自分が必死に努力して抵抗し頑張れば、どうにか世に流されずに、神のもとに踏みとどまれるというものではない、詩人はそう考えていました。すべては神の恵みによります。神は、私の人生の全責任を負って、罪の負債を精算してくださいます。そして、神に従う力をくださいます。それで詩人は、「あなたのしもべの幸いの保証人になってください」と祈ります。この心細い世にあって、詩人が祈った通り、神が私の人生の全責任を担って、最高の人生を生きる保証をしてくださることは、何よりも心強いことです。これは、何ともスケールの大きな、すごい祈りです。

「私の目は、あなたの救いと、あなたの義のことばとを慕って絶え入るばかりです。」(123) 言葉遊びになりますが、「目」はここでのキーワードとなります。先ほど、この詩篇は「アイン詩篇」だと説明しました。単独の文字「אין」は「アイン」と読むのですが、ここに出てくる「目」もまた実は

「アイン」と読みます。つまり「アイン詩篇」は、いわば「目の詩篇」なのです。目が明るければ全身が明るい、目が暗ければ全身が暗く、その人の人生もまた暗いとは、イエスさまの教えでした。

「目」が一体どこを見ているか、あるいはどこを見つめるべきかが、何より肝心となります。詩人の目はどこを見つめていたのでしょうか。それは「あなたの救いと、あなたの義のことば」です。巨大な悪の渦中であって詩人が見つめていたものは、前後左右に自分を取り巻く世の人々の悪の数々ではありません。詩人が見つめていたのは「神の助け」と「神の義のことば」です。

「絶え入る」とは「終わる、使い果たす、滅びる」の意味なので、脇目も振らず、神の「救い」と「義のことば」をひたすら見つめ続けて、それだけで目が潰れる、あるいは目としての役割を果たし終える、ということになります。世の流れに抗って、どこに神のみこころがあるのかを探し求めるのは、戦いなのです。霊的な戦争です。ここで言う「目」は、神を見つめる霊の眼と解釈もできるし、あるいは文字通り、肉の「目」と解釈するなら、「義のことば」、聖書をひたすらに読みあさる「目」と理解できます。

いずれにせよ、詩人は、真剣に、全身全霊傾けて、何が神に喜ばれることかをひたすら探し求め続けました。なぜなら、詩人にとっては、神に喜ばれるか否かは「天下分け目の関ヶ原」だからです。天国に行くか、それとも地獄に行くかの、決定的な分岐点です。もっと言えば、真理を悟れるか否か、神の義を判別できるか否かが勝敗を決するのです。

それで、詩人は祈ります。「**あなたの恵みによってあなたのしもべをあしらってください。私にあなたのおきてを教えてください。**」(124)「恵み(ḥēḏ)」とは「神の変わることはない愛、誠実さ」のことで、「おきて」は「刻みつけられたもの、定め」を意味します。神の敵が無数に渦巻く地上に於いては、状況がくるくると目まぐるしく変化しますが、神の愛とみこころは永遠に変わることがありません。神は変わることなく誠実です。その定めは永遠に変わりません。でも人は、目の前のものに惑わされて、神の永遠の「定め」を見失ってしまいます。

詩人は続く 125 節で告白します。「**私はあなたのしもべです。**」自分は世の「しもべ」ではなく、「あなたのしもべ」だと言うのです。そして、こう祈り求めます。「**私に悟りを授けてください。そうすれば私は、あなたのさとしを知るでしょう。**」「さとし」は通常「あかし」と訳されますが、「十戒」のことです。つまり、神の永遠の定めは十戒に啓示されているのですが、問題は、それを地上に生きている我々生身の人間が悟れるかどうかなのであって、それで、それを神が聖霊の光で悟らせてくださるならば、(神の永遠の定め)「十戒」を理解できる、というのです。

「**今こそ主が行う時です。彼らはあなたのおしえ(トラー：律法)を破りました。**」(126 節直訳)「今こそ主が行う時」とは、教えを捨てる悪者どもに報復を「行う」のか、あるいは、124 節以下で「恵み」を「行う」ことを祈り求めてきた通り、悪人取り巻く中で詩人に十戒を悟らせることを「行う」のかは、わかりません。両方かも知れません。いずれにせよ、恵みにしてもさばきにして

も、神がなさる時だと言います。今こそ、神が絶対主権を振るって恵みとさばきを「行う」時だと言うのです。

締め括りに「それゆえ～、それゆえ～」と、詩人は二節にまたがり結論します。「**それ故、私は、金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します。それ故、すべての戒めで私はすべてを正し（平らにし、真っ直ぐにし）、すべての偽りの道を私は憎みます。**」（127-128 直訳）「金」は、この世で最も高価な宝で、純度が高いほど高価になります。金が採れる所には人が殺到し、我先に金を求めて、人は東へ西へと大移動するのが世の慣わしで、金儲けのためなら、たとえどんなに遠くても東西南北どこの国にでも出て行きます。かつてのアメリカ西海岸の「ゴールドラッシュ」は、昔の話ではありません。「グローバル」と言われる現代に於いては、「金」のためなら場所も手段も選ばないという新たな「ゴールドラッシュ」が世界の至る所で起こっています。「金」は、人を地の果てにまで馳せ行かせ、軍隊を派遣させ、戦争を起こします。「金」の力はまことに恐るべしです。「金」は人を支配し、人を狂わせ、人を滅ぼします。

しかし、詩人の価値観はこれとは完全に正反対でした。詩人にとっては「金よりも、純金よりも」神の「仰せ（神の権威ある命令）」がもっと大切なのです。この世の宝よりも「あなたの仰せを愛します。」これが詩人の告白です。そして、一見価値ありと見えるあらゆる見せかけの「偽りの道」を「憎む」と言います。この世に満ちるすべてのものを神のすべての「戒め」で見直すならば、この世で高みだと言われるものも、神の前には低くなり、これが幸せへの近道だと思ったことも、実は人の目を惑わす脇道に過ぎず、行けども行けども幸せのゴールに辿り着くものではありません。どんなに熱心に猛進しても、それは憎むべき「偽りの道」に過ぎないからです。これが詩人の結論でした。結局、神の戒めこそがこの世で最高に価値あるものです。金銀にまさる宝です。しかも真の宝です。本当の宝です。そして、これこそが唯一私たちの「幸い」を保証してくれるものでした。

これまで見てきたように、詩篇 119 篇の各節には、「神のことば」を意味する言葉が必ず登場していました。でも、なぜか 122 節だけにはそれがありません。そして、その代わりに「幸い」があるのです。それは最高の「良さ、すばらしさ、完璧な最高のすばらしさ」を意味する「トブ」という言葉です。神のことばこそが「良い、すばらしい、これ以上付け加えるものは何もない完璧な最高にすばらしい」ものです。神だけが私たちのすばらしい人生を本当に保証してくださるのです。